

1. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
2. 「アロンとその子ら、またすべてのイスラエル人に告げて言え。
主が命じて仰せられたことは次のとおりである。
3. イスラエルの家の者のだれかが、
牛か子羊かやぎを宿営の中でほふり、あるいは宿営の外でそれをほふって、
4. 主の幕屋の前に主へのささげ物としてささげるために、
それを会見の天幕の入口の所に持って来ないなら、血はその人に帰せられる。
その人は血を流した。
その人はその民の間から断たれる。
5. これは、イスラエル人が、
野外でささげていたそのいけにえを持って来るようにするため、
また会見の天幕の入口の祭司のところで、主に持って来て、
主への和解のいけにえとして、それらをささげるためである。
6. また、祭司が、
その血を会見の天幕の入口にある主の祭壇に注ぎかけ、
その脂肪を主へのなだめのかおりとして焼いて煙にするため、
7. また、彼らが慕って、淫行をしていたやぎの偶像に、彼らが二度といけにえをささげなくなるためである。
これは彼らにとって、代々守るべき永遠のおきてとなる。
8. また、あなたは彼らに言わなければならない。
イスラエルの家の者、
または彼らの間の在留異国人のだれであっても、
全焼か、または、ほかのいけにえをささげ、
9. それを主にささげるために会見の天幕の入口に持って行かないなら、
その者は、その民から断ち切られる。
10. また、イスラエルの家の者、
または彼らの間の在留異国人のだれであっても、
どんな血でも食べるなら、
わたしはその血を食べる者から、わたしの顔をそむけ、その者をその民の間から断つ。
11. なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。
わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。
いのちとして贖いをするのは血である。
12. それゆえ、わたしはイスラエル人に言った。
『あなたがたはだれも血を食べてはならない。
あなたがたの間の在留異国人もまた、だれも血を食べてはならない。』
13. イスラエル人や彼らの間の在留異国人のだれかが、
食べることのできる獣や鳥を狩りで捕えるなら、

その者はその血を注ぎ出し、それを土でおおわなければならない。

14. すべての肉のいのちは、その血が、そのいのちそのものである。

それゆえ、わたしはイスラエル人に言っている。

『あなたがたは、どんな肉の血も食べてはならない。

すべての肉のいのちは、その血そのものであるからだ。

それを食べる者はだれでも断ち切れなければならない。』

15. 自然に死んだものとか、野獣に裂き殺されたものを食べるなら、

この国に生まれた者でも、在留異国人でも、だれでも、その衣服を洗い、水を浴びなければならない。

その者は夕方まで汚れている。

彼はきよい。

16. もし、その衣服を洗わず、その身に水を浴びないなら、その者は自分の咎を負わなければならない。」

説教

レビ記の17章以降は、神の聖なる民とされたイスラエルの具体的な生活のあり方についての規定です。

前の16章まではイスラエルの民が「聖」となるための直接的な規定ではなく、神さまが幕屋に臨在するための環境づくりについて教えられました。そして、17章からはイスラエルの民が「聖」となるための具体的なあり方を教えます。中でも17章では、一言で言えば食生活のあり方が教えられ、具体的には礼拝の場所とその背後にある動物の血に対する警告がなされます。

1. ついで主はモーセに告げて仰せられた。

2. 「アロンとその子ら、またすべてのイスラエル人に告げて言え。

主が命じて仰せられたことは次のとおりである。

3. イスラエルの家の者のだれかが、

牛か子羊かやぎを宿営の中でほふり、あるいは宿営の外でそれをほふって、

4. 主の幕屋の前に主へのささげ物としてささげるために、

それを会見の天幕の入口の所に持って来ないなら、血はその人に帰せられる。

その人は血を流した。

その人はその民の間から断たれる。

イスラエルの民は、神さまから禁じられた食物を食べないようにするだけでは充分ではなく、たとえ「牛」「羊」「やぎ」のように神さまに許可された食物であっても、その食べ方に注意する必要があります。すなわち、それが異教社会の偶像崇拝と混同しないよう、あるいは誤解されぬような食べ方がなされなければなりません。

「牛か子羊かやぎ」のようにいけにえとなる動物の場合、イスラエルの民は自分勝手な場所で屠殺してはなりません。それは必ず会見の幕屋に持って来て屠殺されなければなりません。そして、それを食べる場合には、和解のいけにえとしてささげます。血を祭壇に注ぎ、脂肪を煙にして主に捧げ、祭司が最上の部分を受け取った後に、残りの部分を食べました。全焼のいけにえなど、食べない場合にも必ずいけにえを幕屋へ持って行って、そこで屠殺しなければなりません。なぜなら、彼らがいたエジプトや周辺諸国ではやぎや牛を神として崇拝して(Ⅱ歴代誌 11:15)、同様にイスラエルの民もかつてはやぎの偶像を崇拝していたからです。それ故、「やぎの偶像に、彼らが二度といけにえをささげなくなるため」に、神さまはいけにえを屠殺する場所をわざわざ指定なさいます(レビ

17:7)。そして、勝手な場所でいけにえを屠殺する者には、生き物の血を流した責任を問い、民の間から断ち切ると警告なさるのです(4,9)。たとえ動物であっても、そのいのちは神さまに生かされているいのちです。それを人が勝手に殺してはならず、人間が勝手に殺す時に神さまはその血の責任を問われるのです。これは既に創世記9章5節で警告されていたことでもありました。すべてのいのちは神さまのものなのです。神さまの栄光のために造られました。ですから、それが人の食用であれ贖罪用であれ、人が生き物のいのちを奪うことになる場合、それは神の栄光のためでなければなりません。

食用が許可され、同時にいけにえとならない動物の場合にも、その食べ方が規定されます(10~16)。その際には動物の血を食べてはなりませんでした。

10. また、イスラエルの家の者、
または彼らの間の在留異国人のだれであっても、
どんな血でも食べるなら、
わたしはその血を食べる者から、わたしの顔をそむけ、その者をその民の間から断つ。
11. なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。
わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。
いのちとして贖いをするのは血である。
12. それゆえ、わたしはイスラエル人に言った。
『あなたがたはだれも血を食べてはならない。
あなたがたの間の在留異国人もまた、だれも血を食べてはならない。』

「あなたがたはだれも血を食べてはならない。」(12)動物の血を食べる者に対して、神さまは「わたしの顔を背け、その者をその民の間から断つ」と警告なさいます(10,14)。このため、「狩り」によって捕まえた「獣や鳥」は、その血を地面に注ぎだしてそれを土で覆わなければならず(13)、「(血が注ぎ出されていない)自然に死んだものとか野獣に裂き殺されたものを食べる」者は、「夕方まで汚れ」とされました(15)。どうして「血を食べてはならない」と禁じられているのでしょうか。その理由が二つ挙げられます。一つの理由は、「肉のいのちは血にあるから」です(11前半)。そして、もう一つの理由は、人のいのちを贖うものとして神さまが血を人にお与えになったからです(11後半)。

11. なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。
わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。
いのちとして贖いをするのは血である。

「血」と訳されるヘブル語「~D'ダーム」は、「赤銅色の地面、大地」を意味する「hm'd'a]アダーマー」、さらには塵から造られた人間「~d'a'アダム」と関係し、血が人間存在の根本、あるいは本質を成していることを意味します。それで、血は人間の「いのち^{ネフェシユ}」そのものと呼ばれます(14)。

14. すべての肉のいのちは、その血が、そのいのちそのものである。
それゆえ、わたしはイスラエル人に言っている。
『あなたがたは、どんな肉の血も食べてはならない。
すべての肉のいのちは、その血そのものであるからだ。
それを食べる者はだれでも断ち切られなければならない。』

そして、神さまは、いのちそのものである「血」を人のいのちを贖うものとして人に「与えた」と言われます。

11. (なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。)

わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。

いのちとして贖いをするのは血である。

神さまは、私たち罪人のいのちを贖うために「血」を与えたとされます。「贖う^{キペル}KP」と訳される言葉の基本的な意味は、「覆う、拭き取る(身代金を払って身受けする)」です。つまり、罪を覆う、罪を覆い隠す、罪を見て見ぬふりをする、そこから罪を赦す、拭き取るという意味です。罪を犯した人間は、その罪を覆ってもらわねばならず、神さまは、身代わりのいけにえの流した「血」によって、私たちの罪を覆ってくださると言います。私たちは罪人です。しかも生まれながらの罪人です。根っからの罪人です。本性が堕落しています。どんなに罪を犯さぬよう努力しても、神さまの前にはどうしようもありません。神さまのさばきを受ける以外に道はありません。その罪を贖ってもらわなければなりません。覆ってもらわなければなりません。見て見ぬふりをしてもらわなければなりません。そうでなければ、私たちは救われません。つまり、生まれながらの罪人である私たちにとって、私たちが罪を犯さないよう生きるのは実は二の次であり、より本質的には、まずは罪を贖ってもらわなければならないのです。そうでなければ、どんなに努力しても、私たちにいのちはありません。このように、罪の「贖い」は私たちの死活問題であり、いのちそのものなのです。

私たちを「贖う」力はどこにあるのでしょうか。それはいけにえの「血」にあると神さまは言われます。つまり、私たちの身代わりに死んだ、いのちを捨てたいけにえの「血」にあると言います。いけにえの「血」は、そのいけにえのいのちそのものです。だからこそ、私たちの罪を「贖う」力がそこにあるのです。血はいのちです。血にはいのちを贖う力があります。血は神さまのものなのです。神さまのいのちがあり、神さまの力があるのです。

16章の大贖罪の日の規定では、「幕屋」の聖別がなされました。神さまが人々にご自身の栄光をあらわす「幕屋」の聖別です。17章では「血」の聖別が教えられます。神さまが人々の罪を贖う「血」の聖別です。神さまはいけにえの「血」を通して私たちの罪を贖うのです。だから、「血」を食べてはならないと教えられます。「血」は聖なるものだからです。「血」は神さまのものだからです。「血」は、私たちの罪を贖うための聖なる道具です。否、祭司や祭壇、幕屋と異なって、それらすべてを清め、生かし、いのちを与え、有効にするものです。身代わりとなって死んだいけにえの血がいのちを与えるのです。

「血はいのちである」出エジプトの夜に神さまのさばきを免れることができたのは、門柱に塗った小羊の血によります。出エジプト24章でイスラエルの民が神さまと契約を結んで正式に神さまの民となったのは、小羊の血によります。祭司が聖別されて幕屋の奉仕を行うことができるようになったのは、小羊の血によります。幕屋が聖別されて神と人との交わりがなされるようになったのは、小羊の血によるのです。神の民が神の民として、祭司が祭司として、幕屋が幕屋として、息吹を吹き込まれて、有効に機能するようになるのは、いけにえの血によるのです。どんなに汚れていても、どんなに罪深くても、それを洗いきよめて神の栄光をあらわす働きをさせるのは、いけにえの血の力によるのです。